



○短尺塚 陸奥

○(六)光火部

○火の辨

○橋立龍燈

○分部火

○虎宮火

○野上龍燈

○狸火

○秋葉神火

○狐火王

○入方火

丹後

伊勢

摂津

周防

摂津

遠江

京

越後

○黒塚 武藏

○不知火

○焚火

○二根坊火

○蹉陀龍燈

○光明寺龍燈

○姥火

○千方火

○油盆火

○寒火

豊後

隠岐

出雲

土佐

相模

河内

伊勢

近江

吳國

諸國里人談卷之三

○(五)山野部

○富士

菊岡采山翁著

駿河國富士の相傳者靈帝五年に一夜に地打て大  
湖となり是江列琵琶湖に其王大山なる駿河の富士を  
し江列三上山の貫より溢る故にそ飛如くとも毎半  
六月登つすよ百日の潔斎し江列の人々七日の潔斎し  
このまゝ所迄江の土を前と則結ぶとて 諸心の略言に  
五條のついで一神さびてさすさすさ隠りたる如し  
る根を天の糸よりさけんとさすさすさ月如新もかくらひ  
て日月の光りもさすさすさすさすさすさすさすさすさ



山義城



富士山



○阿蘇

肥後國阿蘇の剱阿蘇郡に在りて其の麓あり

神池 毎日猛煙を吐き山谷鳴動なり ○大明一統志云

日本國阿蘇山石火起接天俗異而禱之有如意

室珠大如鶏卵色青夜有光

○城義

上野國ぬ義の岩山はく冬は氷に突て函とて一峰と云ふ

まろく樹木おろそく繪はあ唐の山はゆる東の方麻摺を松

まろくはひとて多しとて海らにありま丸なる穴あり月輪と云ふ

ありありあまの雲あり多しとて又多しとて土人云石合美天長の時扱

ら築の跡なりとてあり山の麓に中松井田ありとていふ



と二の越肩と二の越頭を四の越頂上佛面を去る越  
以市の谷外通に小連大連とて越に越りて是より西  
は連の三條小瓶治り作りて地獄道に地蔵堂あり  
毎年七月十五日の夜加藤わらわは多にゆき霧をよ  
あもと精霊市とらふし一越より五ノ越まで各堂あり一字  
一歩法に取らる世ありきと九品とらふし作人杖車鞋を  
措く本秋よ茶をこし

地獄谷 地蔵堂あり 八大地獄 各十六の別あり 一百三十六地獄  
血の池い水色赤く血の赤く 下くは猛火燃えたる罵詈  
雑言の教訓へておそくきりきり油くし水に釘のふあり  
岩石待て針のふくく 煥然言も絶たり

俗に云はひりて形を思ふ人の七聖のありくは又あや  
え縁のところに戸牛連小池河某日行三人禪定しるに  
海流も流く時行きて道の名の本法に一越をわ  
あましく念佛しる品もに誰人もあはれあはれく  
念ふ事あるもんと概に多く盛る一巻を巻き流るるけ  
あしと何をおくうけり三人あましく念ふ合し一越をや  
しなむ流るる中の人あはれを念ふ人するんあはれん  
そゆきやいなあひてあましく念ふ概をぬんて念ふ人  
人倫するあましく人あはれかりくして一里ころうた  
五七折の里あり或る童子人湯茶を投げあましく念ふ  
はその名をいかりく人あましく念ふ概をぬんて念ふ人

至無波の海一寺にありて其の息を絶し順日死す今則  
一七日たりこの家に付ひりてとてひを滑りせれと云  
大に此歎一朝飯をこころめて食す毎にゆるし

○雲仙嶽

肥前國高木郡の高山寺所より高賢嶽ありふ常に  
燦て其の若くは幸あつた地獄と移るなり元教十一年  
ありて並ひて高五六尺黒煙の涌るなり其の地獄と云  
酒屋の地獄ハ白濁と云はれに似たり麹屋の地獄ハ黄  
白い音き土漏麹の色のあり藍屋の地獄ハ青濁に  
似たり酒の地獄ハ酒の色の似たり其の地獄ハ  
一て等活大魚熱と云ふ一其派稍熱に似て湯のみ

X

くく如くいふ魚まありありと云青からくは林に温泉あり  
入湯の人常に此に○當山の伽藍ハ文永帝室元年中河基  
兼刺の他日本と大乘院満明密寺あり一三千八百坊を  
塔十九基あり一々天正年中耶蘇宗門盛に作  
僧俗和法子爾時高寺の僧侶亦あり周々修飾せり  
正法よ珍せざるもの皆此の地獄に墮入て今礎か不辨の  
僅に跡りあり一々寺の供あり

○彦山

豊前國田川郡にあり其を彦山と云其根踏て大山  
十の谷四十九の窟あり才一の谷と玉谷と云又靈泉涌出  
と云て瑞穂と云と云又玉泉と云と云



三ノ高の山に三神跡と云ふ北岳天孫總根を中岳の  
伊弉冉尊南岳伊弉諾尊と性古より守護念の山と  
金を辨らうと事六十二町し登紀二月十五日

○白岬

讚岐國河野郡人王七十五代崇徳院を初め今も靈氣  
つよくゆりく移すの奇跡あり一山を白岬に松山に  
し時松を浦少と云ふつと子貝と拾りせ給ひて  
松山の松を浦風吹かせとびらびて去のへまを松山  
と傳へ給ひしよりは瀨の國に松の多しと云ふと  
あまを哀忘見と号を長寛二年に御宝篋四十六巻を  
しとけりゆりく崩落し給ひて西の法隆寺塔より

陵崎勤王千村を移し納められを辭マけるとし  
すやまびのの麻と云ふからん何よる世む

○洞穴

若狭國小浜の空印寺八百比丘尼の住し而く則沙梨  
あり傍に洞穴あり其奥を入りて土人云當り五六世  
公家の住僧の穴に入りてその奥をとうらひ三月と経て舟波  
乃山中に如らるる云りお侍おむし女僧ありては前住  
八百歳にして其容貌十五六歳の壯美と云ひて八百比丘  
尼と稱し里傳ふ云は女僧一人魚を食ひて人多く  
長あたりと云り○又去る國立郡水田村に  
仁王門の傍に榎の伐採あり周り二丈あり造る



信列在傍へ有りぬりたりと云りいふ由へは傍の神体あり  
乃室物より七面山にまより三三三巖に大きあり也あり  
その形曲龍の形に似たり備法象し其水の流るる春氣滝  
と云百丈の白布と云せり雪の天竺を熱地の水ありと  
いへば地を七姉と云りたりき事ハ身延にありて友有

○土國子

甲斐國巨摩郡那箇子新井と云ふ所の郷に土國子  
と云あり火の大小のありと云ふ所の高子のあり丸きあり  
すこの角と云ふ所もあり色は黄色に似たりと云  
於を衣もせしむると割と中に玉きと云。鐘のありと云  
あり鐘の柄ありと云。火のありと云。

○土饅頭

周防國吉敷郡高原氷上山の巖山を後と云ふ地  
かりけり米石。飾石土饅頭と云あり土中より掘り  
出さるる天行病を治す瘡のありと云。神ありと云。い  
毎年二月十三日北辰尊星の祭あり日本才一靈驗の  
あり大祭とし千種百味を供ふ多し良家代々一々余歳  
祭り多しと云。運の祭と云い是し多し良家の子余歳乃内  
年母に星滝の所ありと云。天文十八年より星も今より  
大内義隆よりい祭勢は其の音の祭供土石を供て土中に埋  
しと云。○大内義隆の山陽の陽の大守也。周防山口の城に在り  
相續り家も國中の郷の都に城あり





豊乃乃芝心し小年歳合るは所岡様尾龜井等の討死の  
跡ハ松を載てびりともあり一と色芭蕉の詩

夏 草 中 つりものともとり夏の跡 芭蕉

市の内人はきんぎょを殺し埋る碑をまじき祭り終て天  
塚と号して今に存也

○黒塚

武藏國足立郡大妻野の赤中江あり又奥列安達郡中  
ありあれとも東光坊雲見退教の徳い玄亮の足立郡と平  
下をり別赤光坊用基の寺東光寺と云あり 今會田宗  
記列郡智入記滋はと玄亮國足立郡の赤中江あり  
ありて奥列の寺ハ又と云はれし

六 光火の部

○火の部

陽火の金を鑿の火石を鑿の火本を鑿の火足此の陽火なり  
大陽心火聖精火天の陽火君火人の陽火し○水中火  
石油火の世の陰火龍火雷火天の陰火相火下火人の陰火  
陰火六ツ陽火六ツ天世人の火十二なり又龍能為精螢燐の  
火ハ大ニ妙々出あり以連佛あり佛ありもの大ニ色  
青く燦なり寒火陽燄鬼旗金銀の精氣の火ハ陰火也  
物を焚け又石灰桐油者藤馬糞鳥糞より出る火ハ陽火也  
ものを命くし雷火天の陰火なり物を焚くは陰火の  
陽火なり後岡所蘇雲似燧の火ハ故石を鑿是す

陽火の陽火なり○本草綱目ニ云田野燐火人及牛馬兵  
死者血入土年久所化皆精靈之極也其色青狀如炸  
或聚或散來逼棄入精氣下略

○不知火

豊後國之吉野甲浦の後の霧より相打のぶらぶらの火  
初更のころより出る由に松ふりかよふの大なる空舟  
として合衆をくくりに海中へ引寄せ又海を七鶴  
の淵合よりくくりにて火時拾ひて後出する由の事  
なり四五日月九月子のあつたあつたをけりぬ火と  
いふそのころよりあつた本歴志に日本書紀のぬ火と  
今流るの由くくりにて事なる

○橋立龍

丹後國興謝外天橋立は毎月十二日東半れたる五箇の  
沖より龍燈現る文殊堂の方よりともる堂の常三掛  
の松ありて龍燈の松とて今より正五九月の十六日の夜に  
空より一龍くぐるを天燈とて今より一火ありて  
伊勢の沖燈とて○切戸文殊の海中より出祝願浮檀金  
の像なり拾芥抄ニ云智恩寺丹後九世戸文殊天龍  
六舟供燈唯とあり松並の林海中へ出たり東西  
二里南北二所ありゆりゆり入海して船を渡す  
そのる四所余りた位曼の他日本三曼の其一とす  
本海風記の流るるをひてとて世々ともる由の事

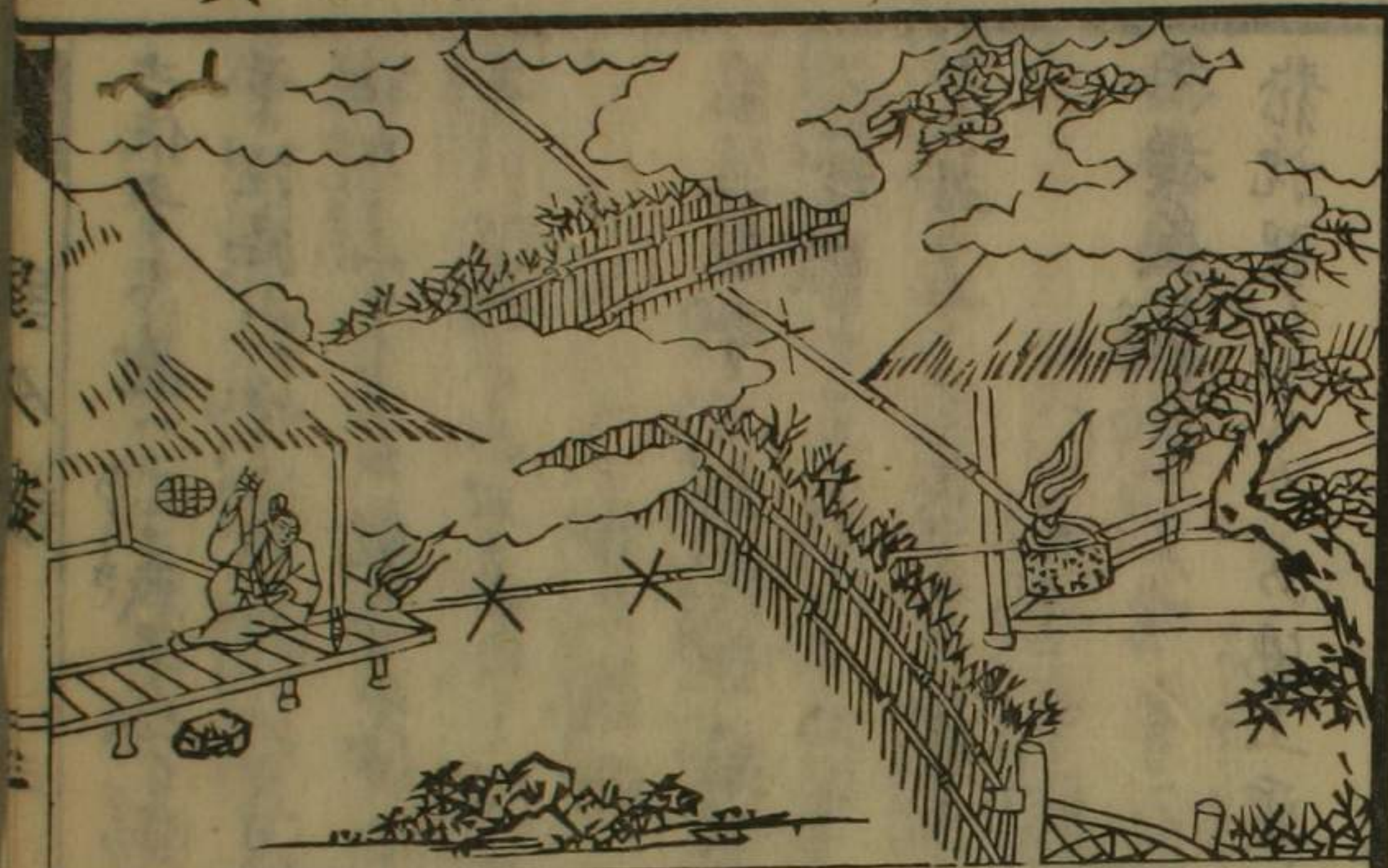






不知火

入方火



あつ天よりひるのたふりあまのついでに海中より龍燈籠し  
 出たり七不思議あり○一、天燈籠焼 ○潮石 四のろし  
 備前の阿比水港千原の岸の水なり ○龍馬 五の阿比水  
 なるく中巻とくぬけ下の巻はくぬけの巻なるま  
 ○農石 方六尺高四尺の石ありそのくま子一尺たりの石は  
 一人のふせゆせんととの中ふり出せ ○金石 扱きく鳴き合  
 のまゝ ○日毎雨 毎月午の刻より雨降る今ふり  
 ○不増不減水 霧あり増るは早天に減る  
 昔忠義上人はふり住居し後子普陀洛山にりる時の人  
 らも持てあつて流泥をりて浄地をりてそれなり浄地寺と  
 りて今も浄地寺なりと云ふ大石として今にあり

土佐守忠義の義上人の尊厳と云ふ諱も別な同く云り  
曾根洛山六中兼洲江省の傳に云波府の同なり  
極々山と云々觀音の津きし日本の傳慧華と云人ハ西國  
基に比爲今ハ世ガの住と九州より二百五十里なり

○野上龍燈

周防國野上庄燃野龍燈は毎年十二月晦日丑の刻に  
龍燈燈とも又西の方五里の浮く龍ガ口と云ふ矢  
を折らむと云龍燈の神火なり里人云と流して紙舟に

○光明寺龍燈

相摸國福金光明寺の沖に毎年十夜の内一お夜  
龍燈燈に云々の海上雲にうつて尺ありし

○狸火

松津國川を那東久田村の體験は燦わりは火人の容  
あつりあつ付半と率て火を燃へりし中と云ふ人  
そ火を乞て桐車とのしくお河より船ガのまき一皆と害  
と云はれ智くは雨あまやうしおの人ハ狸火と云

○燒火

河内國平岡に雨夜に一尺とりの火の玉迫御に飛所は  
お修小昔一人の燒わり平岡社の神燈の油と云毎に盪  
死く後燦火とかなると云く此のりては燈ガよまやあま  
ハの火お來て西のよる傍て倒て溜に尺と云龍のそと  
人の名し紫と叩きあり思ふと遠くんと云國なる火

山ありまきつゝ 鷄籠なりと云

○秋葉神火

遠江國秋葉ふり夜王のあまの火袋伴ともおく  
空をと飛く沖のふり事おしとあり主人を狗賓の  
漁ありと云り將く其二三日の浦との漁獲るく取

○千方火

勢列を志郡秋葉の里川俣川の水より挑灯を千方火  
川の流よそのてんから事水より事一おとせ千方の火より  
びり一坂東の千方いけおとせ一ひりとし大自の門の礎の如  
今も存せりせんより藤原村の場村丸内村三と丸二の丸丸  
とら積りあり今ん七とせの事し千方今見大自神と云則けあ  
ぬまらし

○狐火玉

元祿のはりの頃上原の人東川へ夜川より出る烟を  
ける加茂の者より狐火もとせし事ありと云らるる  
を折るやとせし一巻の煙をさすぬ烟の中い光るもの  
海りよありとせしその光り赫々たりと云らるる  
をんせしその色を向く霧の卵と云とて昼光より  
今も輝り夜分の光り挑灯より出るものせし  
又とせし我守と云とせし事ありと云らるる  
又とせし川より出るもの玉を砂の傍より入射りかけて  
折しと云とせし一石と云らるる大石と云らるる  
夜て川水十方へとせし事ありと云らるる

瀬より海までをくわくくわくして玉の如く二言じうた  
光りありぬらりうらりと口押しく細を撥て速りし  
瀬より海までをくわくくわくして玉の如く

○油盗火

近江國大津の八町に玉の如くの大聖様に飛舟を事  
まかすにわたり主人のまじりて志望の里に油を煮るもの  
あり毎に大はたの使居の油をぬきしうらそそ其死  
絶絶せしむりてまひの火今に瀬まで  
○又唐山の西の棟に夏の夜燦火をぬきしを油坊とらふ  
風縁ちよ海に七條朱萐の道元が火をぬきしを油坊とらふ  
ありと信ふに多くあり

○入方史

我後國蕭系郡入方村庄をあると云村長の君家の屋の火の  
燃ゆる穴あり常いふ白く蓋し其白の穴より炬火の  
く、緒くして赤丸を光し一炬火に十倍に夜に連清の如  
き大竹を光し一わおこけりて一炬火をく東の宮の  
わくすくすく燻火かきとあさくぬに物を焼く希代の  
童室かり寒火とらふ是なり

○火流布

え徳のころ長崎の住花明とらふ火流布とらふ中蘇雲  
茶々の世にかりものくあを火流布とらふ中蘇雲  
南省の菊海に火流布とらふ其の洞にかり火流布



